

智慧の樹、生命の樹：Das Licht und das Recht

総合人間学部・人間・環境学研究科 松田泰代

朝、糺の森を通りぬけ、夕もしくは夜、同じ道を逆方向に通り返けてゆく。春の柔らかい光の中を、夏の強い陰影のある土の上を、秋の朝の霧に包まれて、冬の夜の澄める月の下を、四季折々、朝夕、様々な森が楽しめる。同じ森であっても、万物の営みやそれを味わう私という個の変化によって様々な森が存在する。森は分け入ったものを包容し、自らも変容するが、アイデンティティは失わない。静かな、けれども正確なリズムで時が流れている。森を散策する人は、その空気に触れ癒され安らぎを感じる。

図書館のベストセラー複本購入問題について、馬場俊明氏は図書館人・利用者の立場から明解な光を当てた⁽¹⁾。そして、その論文の中で図書館という森について論じ、育てようと提唱した。心動かす素晴らしい文章であった。この問題で、知識人といわれている人々が主張した考え方や経済効果にのみに集約してしまう感性を寂しく思い、また、自分のポジションで物を見、考え、判断することなしに、形成されつつある既成概念に捕まってしまう人に憂いを感じていた。だから、この論文を読んで救われた。森から享受したものに感謝することなく、森を守ろうとは思わない、搾取だけの世界はあまりにも物悲しい。人間の品性とは、徳とはなんだろうか。

ミヒャエル・プレト・リウス(1571 - 1621)は、『音楽大全』を著したことによって、美学史上不朽の位置を占めた音楽美学者といわれている。『楽記』⁽²⁾と比較して、キリスト教の神を通して光を当てたか聖人君子を通して光を当てたかの違いで、本質は同じことを語っているように感じる。プレト・リウスは、人間の目的は何かを考察し、そこから音楽を位置づけた。「人間の目的は二つある。すなわち、ひとつには、真理の探求ないし認識、もうひとつは、徳の選択

徳を選びとって身に体することである」と述べた。旧約聖書の創世記をもとに、前者を智慧の樹、後者を生命の樹とし、ルターの訳から「das Liecht vund Recht」⁽³⁾と言いあらわした⁽⁴⁾。正しさというのは調和のとれた完全性と理解していただきたい。図書館は、智慧の樹、生命の樹どちらも大切に育てなければならない。

図書館は、現在から未来の利用者のために存在する。人類千年の計であって欲しいと願う。大学図書館は、その大学で教育を受ける、授ける、研究する人のために運営され、必要と欲し門をたたくすべての人に開かれている。人環・総人図書館は、全学共通科目を履修している学生のための図書館という機能も有している。京都大学の門をくぐった若い人々に図書館という森を楽しんでいただきたい。そのためにも、まず図書館へ足を運んでもらえるよう努力している。一度、読書する楽しみを知った人は、自ら図書館という森で遊びいろいろな発見をしていくだろう。況んや、解は一つだけではなく、時にはなかったり多くの解が存在するということをや。人環・総人図書館は、研究書を充実させつつ、学生のための図書館という顔を失わないでいたい。新宮秀夫名誉教授は、「文芸作品の有難さは、説教ではなくて仮想の世界ながら幸福のあり方を体験させてくれるところにある」「多くの作品を読んだおかげで、人生を何十回、何百回も生きることができた」⁽⁵⁾と述べている。古えにも通じ、現代にも明るい人であるために本を読もう。(まつだ やすよ)

(1) 『出版ニュース』no.1959(2003.01) p.10-14 (2) 『礼記』第十九 (3)現代ドイツ語では「Das Licht und das Recht」(4)今道友信『精神と音楽の交響』(音楽之友社、1997) p.95-114 (5) 『幸福ということ』(日本放送出版協会、1998) p.120